

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マレーシアは豊かな国なのか

穴沢眞 (小樽商科大学学長)

マレーシアに初めて行った時から、個人的には豊かな国だと思っていた。首都クアラルンプールやその近郊にいたことも影響しているかもしれない。ただ、地方に行った際も貧困を目の当たりにすることはなく、ゆったりと時間が流れることにむしろ金銭でははかれない豊かさを感じた。

豊かさをはかる方法は多様である。一般的には名目の1人当たり国内総生産(GDP)が共通の指標として使われることが多い。国際通貨基金(IMF)の数値を見ると2021年のマレーシアの1人当たりGDPは1万1,399米ドル(約158万円)であり、世界ランキングは第69位であった。ちなみに同年の日本の1人当たりGDPは3万9,340米ドルで、世界ランキングは第28位であった。

東南アジア諸国連合(ASEAN)では、マレーシアはシンガポール、ブルネイに次いで第3位である。シンガポールは世界ランキングでも第5位と非常に所得水準が高い。マレーシア、特にクアラルンプールやペナン州ジョージタウンなどの都市部で生活すると、日本との経済的な差を感じることは少ないであろう。

1人当たりGDPは国際比較のために米ドルで換算される。しかし、為替レートはさまざまな要因で決定される。日本では最近、円安が進行している。これにより、ドル換算の1人当たりGDPは円安という要因だけで下がる。逆に言えば円高が進めばそれだけで日本のドル表示での1人当たりGDPは上昇する。

マレーシアの場合、アジア経済危機後に一時的に固定相場制を導入したことはあるが、基本的には変動相場制のため為替レートは変化する。マレーシアリングの対ドルレートが上がれば、ドル換算のマレーシアの1人当たりGDPは上昇する。

リングと円との交換レートも大きく変化した。1980年代前半、プラザ合意後の円高が始まるまでは、1リングはおよそ100円であった。その後、急速な円高により1リングが25円付近で推移していた。現在はやや円が下がってきており、1リングは約30円である。マレーシア自体の物価も上がってきているが、円安もあり日本人観光客などにとっての割安感は減少しているといえる。

生活の実感として、マレーシアの1人当たりGDPが上にあげたように日本の数値に大きく後れを取るとは思えない人も多いであろう。すでに述べたように1人当たりGDPは国際比較のため米ドルで評価され、

為替レートの変動により大きく変わる。そのため、実態にそぐわない場合もある。

これに代わり、当該通貨でどれだけの財やサービスを購入できるかを基に算出したものが購買力平価(PPP)である。近年は各国のビックマックの価格を比較して算出するビックマック指数を使うことがある。これは非常に分かりやすい指数であるが、単一の商品で比較することは正確さを欠くものであり、参考程度に使用すべき指数である。

冒頭であげた1人当たりGDPを同じく21年の購買力平価換算で見るとマレーシアは2万9,686米ドルで世界ランキングは第56位となり、名目値よりも数値もランキングも上がる。マレーシアリングは名目の対ドル為替レートよりも購買力平価換算のほうが米ドルに対して高いということになる。マレーシアは国内製品の輸出に有利になるように為替レートをリング安にする傾向がある。

一方、日本の数値は4万4,739米ドルで世界ランキングは第36位となる。数値は上がるもののランキングは下がっている。その結果、購買力平価のみで1人当たりGDPのマレーシアと日本の差は縮小し、さらにランキングでもその差が小さくなる。ちなみに購買力平価で1人当たりGDPをみると日本は名目では上回っていた韓国、台湾の後塵(こうじん)を拝することになる。

ただし、これまで述べてきた1人当たりGDPはあくまでもGDPを人口で割った平均値であり、所得格差については語ってこない点は注意すべきである。マレーシアはアジアの中でも所得格差が大きい国であり、都市と農村間、また、人種間の所得格差も解消されてはいない。経済的には全体の所得向上と並行して格差の是正が引き続き求められる。

< 筆者紹介 >

1957年生まれ。北海道大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。経済学博士。専門はマレーシア経済、工業化政策。小樽商科大学講師、助教授、教授を経て2020年より小樽商科大学学長。1988年、93年にマレーシア国立マラヤ大学経済行政学部客員研究員。日本マレーシア学会理事、アジア経営学会理事、北海道経済学会理事。